

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 6年次生 島崎頼子

1. はじめに

私は2015年10月10日(土)から10月14日(水)まで、オランダ・ロッテルダムで開催された14th International congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicologyに参加しました。目的はこの学会でアセトアミノフェンの慢性肝毒性の予測についてポスターで発表するためです。



Fig.1 右：学会会場の最寄り駅(CENTRAAL STATION)
左：学会会場内のカフェテリア (Coffee break 中)

2. Young Scientists' Lunch

10月12日(月)。若手の学会参加者だけを集めた昼食会に参加しました。昼食会の会場の入り口で一人一人に構造式の印刷された紙を渡され、座るテーブルが決まりました。私の座ったテーブルは日本2人・アメリカ1人・フランス3人・ポーランド1人・ブラジル1人の8人でした。全員と自己紹介を済ませた後、会話しました。ブラジルから来た方は友人が私と同行した本学の学生と同じテーブルにいるとのことでした。また、フランスから来た方は薬剤師で、以前は病院で働いていたけれど今は研究職についているそうです。今回の学会には3人で参加し、バンコマイシンのTDMに関する発表に一番関心を置いているとの事でした。私も薬学を勉強中で、将来は公務員として生まれ育った街の為に働きたいといった内容を話しました。

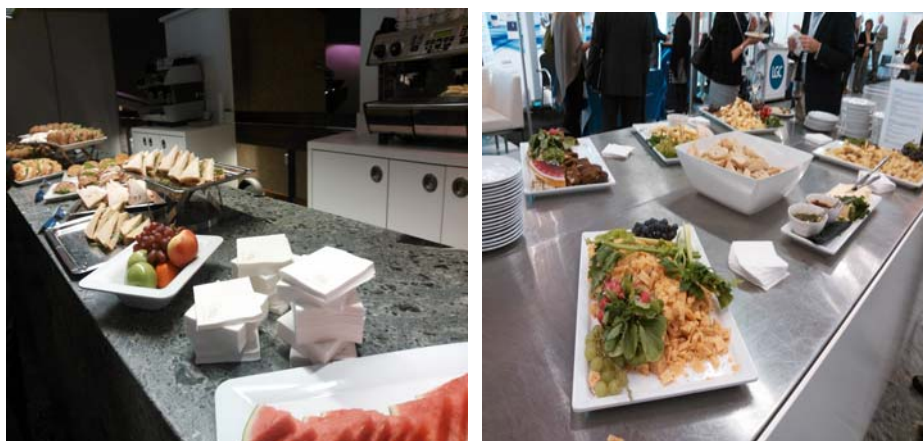
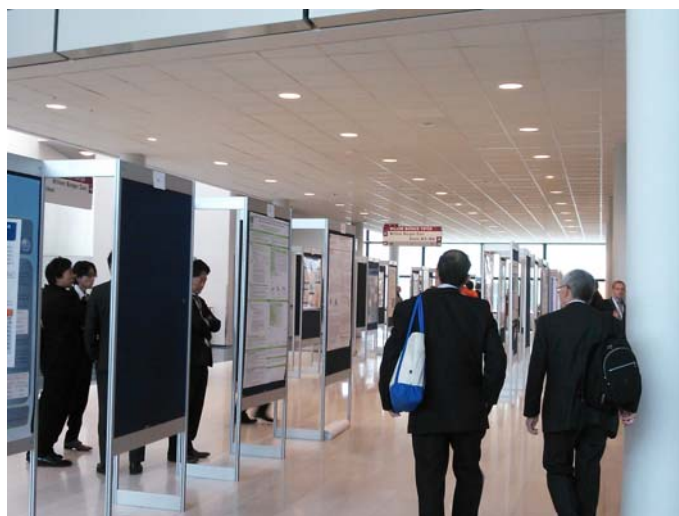


Fig.2 Young Scientists' Lunch の食事

3. Concurrent Abstracts and Posters

10月13日(火)、今回の学会参加の最大の目的である Poster Session です。私の発表の順番は Poster Session VIIIブースの最後の発表でした。13:20~14:15 の間に 11人が発表する予定で、それぞれの見学者や関係者が発表を経る毎にギャラリーが増え、私の前の同研究室の田中君の発表する時点で緊張から彼の発表する声あまり聞こえていなかったです。自分の発表の時、とにかく緊張している事を自覚していたので、持ち時間を守ることよりも正確に真摯に伝える事を第一にしました。というのも、同じグループ内で一人ポスターだけ貼って発表しなかった方がいたので少しでも時間に余裕があったからです。悔しかった事は、発表後の質疑応答の際、英語が聞き取れなかったことにより、自分ひとりでは対応しきれなかった事です。持ち時間5分を過ぎていたと思いますが、発表が終了した時に聞いた拍手は今でも心に残っています。今までやってきたことが他の研究者の目に触れて評価されるのはこういう事だと実感しました。



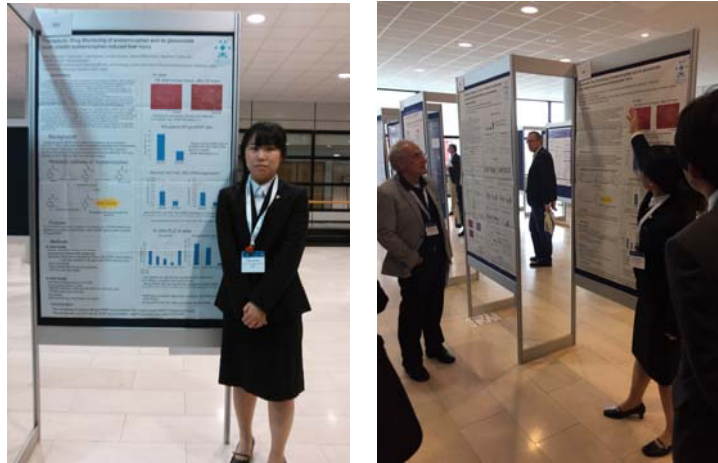


Fig.3 上：ポスターセッション会場の様子。
左下：発表ポスター前で。
右下：ポスター発表中の様子。

4. 最後に

私にとって生まれて初めての海外で、オランダに到着したばかりの時は発表する以前に日常会話ですら緊張で上手く言葉にできませんでした。しかし、**Young Scientists' Lunch**のような機会を通じて拙い英語で詰まりながらも話そうとする姿勢があれば相手も分かろうと聴いて理解しようとしてくれると感じました。また、海外の研究者の意見を聞く事で新しい刺激を貰えました。

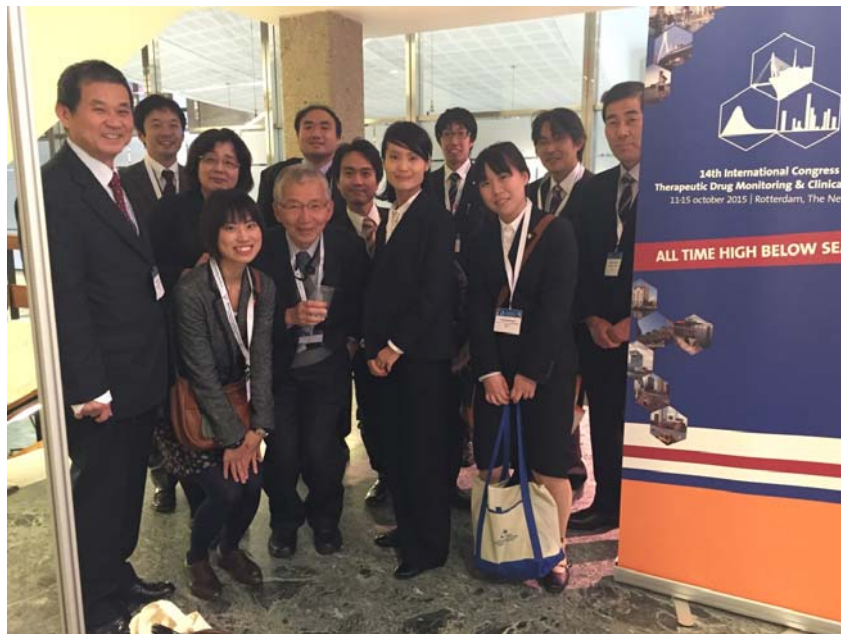


Fig.4 学会会場前で日本からの参加者の方達と。